

人口問題研究所

研究資料第十六号

昭和二十二年十月

產界制限問題概観

厚生省

人口問題研究所

はしがき

本輯は研究新報日誌及び研究第五卷第七、八九の合併号に掲載される
著の論稿の序文及び目録を、並に著者の人口理論的省察の要旨を簡
約摘要したるものである。

(大友 技 官)

目次

一、問題の性質と要旨

(一) 問題の性質

(二) 問題の要旨

二、近代的人口制限行為としての歴史的意义は何処にあるか？

三、近代資本主義社会の発展は如何にしてこの史的成果を實現したか？

(一) 歴史的發展 産児制限が近代市民階級の市民的敬養として成立す

るまで

(二) 理論的反省 近代社会の人口法則について

四、今日の産児制限に附帯する二三の諸問題 種々の産児制限を討論につ

いて

(四) 今日の産児制限に付随する二三の暗影について

(五) 種々の産児制限の比較について

五 人口問題の立場から見た産児制限問題の核心点と人口政策的要請

六 總結的摘要

七 特に我が国に於ける問題の特殊の様態について

一 問題の性質と要點

(一) 問題の性質

我々が今日「産鬼制限」または「産鬼調節」とよんでいる性生治の人間の抑制行為は、個々の家族生活を中心とし個々の人の自由を發意に基く行為ではあるが、しかし大衆的に普及した大量現象として然るべき歴史社会的必然性をもつたもの、又さういふいふでこゝ理論的省察の対象としてとりあげられるべき「問題」を宿している。それは特に個人の自由と、従つてそれの責任觀念の發達と強化とを信條とする近代精神をその思想的背景とし、私生活を各自の自由と責任とに和らげ自ら改善し向上させようとする努力を直接の運動因として行われるところの、近代市民に特有な産鬼制限行為である。人間の歴史と共に古い人口制限行為の様に近代的

形態といつてよいものである。所謂新マルサス主義の主張と運動とはそのような産業社会の必然性の最も自覺的かつ典型的に表現されたものであるが、しかしそれは總くしてこの近代的志向の一つの表現形態であつて、その根柢を正すものは更に廣くかつ深いものでなければならぬ。そして又そのいう広汎かつ深刻な産業社会的現象としてこそそれは今日の人の問題の一點點に透がひ出てくるのである。

2. 我々の産兒制限行爲を性格づける右の如き近代的特性は之を更にその實際の技術的側面から眺めると、一段と明瞭になる。近代市民の性格的至個人生命尊重の精神は、墮胎や嬰兒殺しの旧習を去り、新しい生命をその受胎以前に防止しようとする近代的避妊法を中心とするものとなつた。新マルサス主義運動の勸導するところはこの點に在りても亦もつとも無

にほつて手ぐの、尸史社会的條件があり、
後つて又そこには下天ぐの陰影と

段階のあつても非難難い。好むか意圖が墮胎の實行をその後面の社会

的随伴現象として普及せしめざるを得ぬ理由も亦そこにある。そういう意

味で我々は広く人工流産行爲をも含りて之を近代的人口制限行爲としての

産鬼制限とし、併せて之を理論的省察の対象として問題とせば好む所らぬ。

3. 之を要するに、我々の問題とある産鬼制限とはその現実的恣態に即

して、自らその私生活を経済的破綻から救うのみならず、更に之を改善

向上して近代社会の提供する社会的福祉を含有し、之とする近代市民に特

有する努力をいひ、又その精神的基調に即して、近代社会の信條である個

人の自由と責任とを進んで私生活の上にも貫徹せしめんとする深い精神的

背景をもつてゐる。それは生命の歡びを利己と云ふべく享受しようとする
 ルネッサンス的精神と自らの行為を合理的打算の下に再評價しその全生活
 を理性の支配下に執こうとする勝れた資本主義的精神とを綜合しようとする
 事、その未成熟ではあるが、それだけにまた野心的な近代精神運動の典
 型的な一環をなすものでなければならぬ。産界制限に對する是非賛否の論
 もそのような深い精神的要因に對する十分の配慮を欠いては四年ある個人
 的好意の成を起し難いと思ふ。

(五) 問題の要旨

所謂産界制限問題といふ下りところの大要は、
 一人に問題の立場からとらへられれば、
 かと云ふ。

1. 人口制限は、何よりもまず近代的人口制限行爲としての其の历史的な意義と、
と存するべきを、広くは人口史的展望から、特にまた近代資本主義社会
発展の史的成果として解明しをければならぬ。

2. 併せて、先般ある史的成果を結實させる現実の社会経済的諸前提は
必ずしも其の成果に相応したものではな、のが、歴史の通例で、そう、い

も、我は、は、の近代市民の近代的教育は、御、いかなる社会経済的要請と
従つて、それに伴う社会階級的合理化とその葛藤とを、損、行として貫徹し
れたものであるかを解明するところがなければならぬ。産、鬼制限の普及に

伴う避、中が、大、い諸弊害も、産、鬼制限に対する是非賛否の論の岐る、ところ
も、亦、その、ようを分析を通じてのみ始めて明らかになることが、ど、う、よう、そ
して特に人口問題の立場からは、産、鬼制限の普及に伴う出生率の恒常的な低

下傾向と云は伴う新しい人口危機の問題を強くとりあげねばならぬ。

3. 従つて我々はこの人口危機への展望下に人口問題の立場から要望せ

られる人口政策的指導の目標を明らかにせねばならぬ。それは所謂人口危

機なるものの本質を解明し、人口問題そのものの根本の意味と立場とを自

省する事によつてのみ始めて能くしうると云ふのが問題でなければならぬ。

人口制限問題の宿してゐる問題の性質と深さとは当然にそれだけの理論

的考察を要請するといつてよいのである。

三. 近代的人口制限行爲としての歴史的意义は何処にあるか？

1. 過剰人口の脅威は人間の歴史と共に古く、人口問題から不人問の

歴史は常に何らかの人口制限の努力と不可分に結ばつてゐる。過剰人口

の制限は原始共同社会にあり、それは強力を共同社会的要請として遺憾なく貫

の制限は原始共同社会にあり、それは強力を共同社会的要請として遺憾なく貫

7.
微されていながら、私経済の発展に伴う共同社会的結合の弛緩は、社会的生
産力の階段の進歩にも抱ら下、厚く過剰人口傾向の現実化を歴史的な人類
史的史実として展開させている。がこれらの史実が特に陰惨な人口史的記
録として回想されるのは、社会の進化、経済の発展が、原始共同社会の解
体以降、社会成員の階級的分化とその葛藤を槓杆として推進されてきたこ
とと離しては考へ難い。特に社会的生産力が停滞化する場合には、この階級
会的な機構は、就中一般下層大衆に押し、陰惨な社会的強制力として作
用してきた實感せられる。中期以降の封建社会はその最も典型的な實例を
示すものである。特に農民大衆の階級と地主階級、及びそれらによって維
持せられていた人口の所謂封建的停滞性は、封建社会の人口制限機構の階
級的壓制と又その不健全を示示して、封建的剝奪を踏みこえ

余利人口の都市流亡は既に新しい近代の生成を実証する胎動的現象でもあ
つた。従つて他人の自由と解放とを信条とし、又その眞の起動力となる近代
社会の「史的意義」と使命とは何よりも先ず人口をこの封建的停滞性か
ら解放することであり、そして解放される個々人の自由と責任とに即し
て人口制限のための社会的要請を再建し貫徹することであつたといつても
よい。今日の産界制限行為を貫く史的含意は、かくこの奥にあり、そこに
その「史的なるが故に」動かさ難い意義と存在理由とがあるといえよう。
よ。 歴史に興へられし目的といふものは、定かたが、物にして社会進化の
「史は個体の独立、個人の解放」という方向にあり、近代社会の生成
に當り劃時代的意義も亦この基本動向にあり、個人の事実として始めて實現
したところにある。近代社会に即して實現された史上未曾有の人口増加も

また三につづく新しい産業制限思想の普及と実行も、その相互的な現象形
態に拘らず、共に同じ時代の基本動向を枢軸として行はるものである。
ることは言うまでもない。そして個人の解放に伴う結婚出産の増加が個人
の自制に伴う産児数の制限行爲へ轉化するところに、我々はこの近代的自
由と解放の精神が社会心理的によく洗練せられ、近代市民の市民道徳
的傾向としていよいよ完全しつゝあることを認めざるを得ない。その行爲
過ぎた利弊と功過については姑く問はず、その世界的動向に就いては動
かし難い含蓄をもつていふべきなのである。

三、併し乍ら、個人の自由と解放とはゆがみも社会的連帶性を棄てるこ
とをいふしなない。寧ろそれは事物的な拘束を越え、眼にみえない一層緊密
な結合關係を前提とするもので、その根底には人間共同の運命に對する深

社会的結合の意識がなければならぬ。そのような運命共同体の結合

個人の解放、い、かえれば個人の自己目的な倫理的な存在価値

の存在論的前提として、階級社会に於ける階級の分裂と作為の中に於いて

も、牙和何らかのいふに於いて実感せられるものでなければならぬ。今日

の産鬼制限思想がその實際に於いて牙和依俗を市民経済的打算の域を越え

ることあまり遠く去らば、個体的生命に対する強いその近代的感覚

が新しい社会生活形態への指向を胎せしめる胚種でもあることは否定すべ

くもない事実である。今日の産鬼制限思想に独特の色あいを添えている優

生学的思想は、牙和個人主義的視野の狭隘性と自己辯解的な文化的粉飾

性を多分にもつているとはいえ、少くともそのような新しい生活理想への

結びつきを一つの可能性を暗示している点については異論があるまいと思

10. 産児制限は、早に社会進化の基本動向の中、その成立の理由をもつて
いるばかりで、
思ひ新しい社会生活理想への一つの技術的要因として
も亦重視し難い。史的含蓄を宿してゐるといつまよいのである。

三、近代資本主義社会の発展は如何にしてこの史的成果を實現したか

① 歴史的展望 産児制限が近代市民階級の市民的教養として成立する

1. 人口問題から見る近代社会生成の史的使命は何よりも先づ人口を

の封建的停滞性から解放することにあつた。重商主義時代の人口記念思

想と人口増殖政策とはこの使命に添うたものであつた。併し、新しく

専ら人口増殖政策とは、新しい産業労働人口として古い生活基盤から解放され

自由な人は層であつた。この自由と解放の近代的本質を社会的規模と
 深刻さにおいて実現したものが産業革命にほじまる新しい階級分化の進行
 でありその生活基盤から遠放すれど農民や手工業者の大群は、当時のイキ
 リ又ハ所謂貧民問題にも窺われよう。過剰人口問題として深刻な社会
 的関心を惹いた。近代人口問題はそのような過剰人口問題として始つたわ
 けで、その後も何らかのいふ問題の再燃するところ。そこには必ずその
 ぶちを階級分化の新しい進行と発展とがあるといつてよい。近代的階級分
 化とその葛藤とを離れては近代人口問題の核心を捕捉するに由ないであ
 る。

2. 近代資本主義のその後の発展の発展は解放された人口を新しい労働
 者階級に再編成したばかりでなく、史上未曾有の人口増加と一般生活水

準が不断的に上昇の程の中に実現した。そして嘗ては動物的で最低限生活に
放置されていた勞働者もまた一個の近代的市民として生活し意識し思考
可能なことと可能にするに到つたこと。これは近代資本主義の発展が達成した史
的成果の最も大いなるものの一つといつてよいものである。と同時に個人
の自由と責任とに委託された人口増加を近代社会の社会的必要に順應させ
るための近代的な人口制限行為の基本的な前提も亦こゝに実現せられた
といつてよい。といふのは、近代社会の提供する社会的福祉をより多く享
受しようがために行われる今日の産児制限の基本前提も亦こゝに実現され
たとはいつてよいからである。一定の生活水準の上昇を俟つことなしには有り得
ない生活さぶつとある徳取も亦生れることがないのである。

3. 併し乍ら、産児制限思想とその実行の大衆的普及には、右の如き一

般生活水準の上昇と併せて、これと表裏して大衆的生活苦の深甚を有無視
 することができない。一般生活水準は確かに上昇したし、大衆の勤勞所得は
 それだけ増大した。これは相違ないが、一般に所得の増大が生活水準の上昇に遠
 不足なく順応し得たとしても、一般生活水準の上昇は新しい生活欲望への
 利戟を逼り、近代的意味における新しい生活苦の思想を培養するに十分な
 あり、職業生活における自由競争の天賦は資本主義経済と不可分な果敢の
 変動と相俟つてそのような生活欲望を近代市民に種々な生活不安の心理に
 まで内攻させるに事かゝる。のみならず近代資本主義の發展は概ね前近
 紀の八十年を境として帝國主義的に向への傾斜を愈々強くした。これは海
 外市場における独占的利潤の獲得が國民大衆の生活水準の上昇よりもより
 多く資本家的利潤の源泉として関心をもち、これに到つたことをいふべきである。それ

正確かに資本主義經濟の新しい繁榮を齎らしはした。この發展に伴う資本主義的生産の高度化は同時にその分配關係をも新しい發展段階へ押し進めたことを忘れてはならぬ。之を要するに、不斷の拡大再生産を信條とする資本主義經濟の發展速度の緩慢化と、生産手段の近代化の促進のため帝國的な發展段階の移行とが、共に相俟つて國民大衆の生活余白を狹隘化し、その近代的な生活心理をいよゝ／＼組織化したのであろうことは疑ない。産業制限の大衆的普及と、従つて又その當然の結果である出生率の恒常的低下傾向が、西歐の先進諸國に於いて既に前記の如き七〇年代の末に始まることは決して偶然ではなからう。

4. 之を要するに、産業の近代化は一般生活水準の不斷の上昇傾向を根本の前提とし、之と平行する大衆生活の相対的貧乏隘隘化、特に近代的生活不安

の深刻化を直接の條件として生れぬ近代資本主義発展の史的成果といつた

よく、近代社会はこゝにその道利人口への脅威を自ら抑制すべき最も近代

的かつ合理的なる方法を近代市民的教養の一つとして実現するに到つたと

いうこともできよう。近代初頭の道利人口問題と機縁とするマルサスの人

口論は、この道利人口の責任を人為を超えたる人間の過大増殖傾向に帰着せ

しめようとする長に在りて、専ら支配階級の利害を代表するものであつた

か、近代資本主義の発展が可能にした廣泛な近代市民階級層の生成と共に

それは近代市民階級の實情をオロギヤとして継承せられ、近代市民

的教養の理論的背景として更新せらるゝに到つたといふこともできよう。

所謂新マルサス主義とはマルサス人口論がその新しい大衆的基盤の上に新

生したものと云つてよく、そのいう意味でこそ今日の産児制限運動の

最も自覚的を表現といつてよいのである。

その史的生成が如何なる欠乏と窮迫を條件とするかば必ずしもその達成された史的成果の文化的價値を決定する妨げとはならぬ。況んや産業

制限は近代資本主義の発展に伴う一般生活水準の不断の上昇過程をその社会的背景とし、自らを

市場に賣るべき商品をもたぬ労働者を

も一個の近代市民として

考慮し思考しうるに到らしめた。廣汎な近代

的市民大衆層が成立するその階級的基盤として實現されたもので、それが近

代市民の市民的教養としてもちつた。又いふ文化的意義と價値とは否定し難い。

今日の文明國諸國に於ける社会階級別出生率の下降階級に高く上層階級に昇るに随つて低下するといふ事實こそ産業制限が近代市民の近代的教養の

一つであることを実証するもので、しかも各種の人口統計はこの近代的

差別を生ずるが主として産鬼制限の普及度の結果であることとを示して遺憾をいのである。

(五) 理論的反省、近代社会の人口法則について

人 近代初頭の過剰人口論は、いふかえれば没落しゆく小生産者階級の

反抗運動を史的素材として、その人口論がその理論的結構に於いて当

時のイギリス支配階級の利害を代辯するものであったことは既に前段論及

せるが如くであるが大陸に於けるフランス革命の進行に於けるイギリス支

配階級の恐怖と反動とをその思想的背景として特に時代の関心を惹いたも

のであつたことと疑はれない。しかし又、産業革命のなみ緒に於いてはかりの

近代資本主義は自ら解放し、過剰人口を新しい近代市民階級に再編する力

も豫想ももつていなかったし、他方この近代解放過程の中に没落しゆく

人口層は新時代の教養を身に付けようとする。動物的な増殖力に
 よってその新しい存在を主張する以前の生き方を知らなかつたといつてい
 く当時の実情にあつたは、人間の動物的な過大増殖力を根本前提としな
 るルサスの人論はまさしく時代の問題を最も寫實的に理論化したものとい
 つてもよく、そこに近代人口問題の最初の一投石としての没すべからざる
 意義も亦あるといえよう。

二、併し乍ら、人間の存在自体がもとく歴史社会的所産であり、人間
 生来の増殖力と考えられるものも特定の歴史社会的形成作用を媒介とする
 ことなしに突在するわけのものではない。解放された新人口層の動物的な
 増殖力も單に彼等の無智と無教養の結果とばかり考へるのは人間の心意の
 実体的基盤である時代の背景を忘れぬをしりて免れまいと思ふ。結婚出産

の近代的解放の底には拡大再生産を信條とする近代資本主義的生産の一般
 的発展傾向が与付けねばならぬ。そしてマルクスが人口法則の「歴史社会的制
 約性を強調し、資本の有機的構成に於ける不断の高度化、い、かえれば本
 変資本部分の飛躍的な増大傾向に對する可変資本部分の相對的削減傾向
 の中に資本主義的生産方法に不可分の過剰人口傾向の必然性を指摘したと
 き、近代的過剰人口の本質は始めて究明せらるゝに到つたといつてよい。
 マルクスによつてその一歩を踏み越せられた近代社会の人口法則は更に廣汎
 な唯物史觀的發展の下に展開せられるべき課題を残してゐるとはいへな
 せん。それが生物學的な過大増殖傾向を前提とした單なる失業人口論に過ぎない上
 いう一般の批評は当を得ないと思ふ。それゆゑとて社会經濟的分析の
 する限りに於いて近代社会に特有な人口増加の傾向と之を前提とする過剰

人口傾向の必然性を指摘して遺憾をいのである。失業人口とはこの近代
的過剰人口の近代的名稱に外なりぬ。

3. 尤も資本主義の發展は一般生活水準の劃時代の上昇を可能にし、

そして労働者階級をも亦近代的小市民の生活意識にまで教化するのに成功

した。今日の世相は嘗てマルサスやマルクスが取りあつた露骨な階級的対

立に相距ること遠いが、しかしマルクスの指摘した資本主義的生産の構造

的矛盾そのものは今日と雖もなお變易しつゝ存する。そして一定の大

衆的生活水準の上昇と共に、この構造的矛盾はその高、産業制限の思想と

その実行、より社会経済的を推進力として作用する。社会の高と福祉の

飛躍的の増大に對する個人の分有能力の相對的を減少傾向に、社会経済

的にも、乃至は社会心理的。近代市民を産鬼制限を配りかゝる根本の

理由に外ならないのである。たゞそのような社会経済的矛盾の社会心理的錯綜、その推移の中に我々は近代市民に特有な道徳的葛藤と努力の跡を看取することができるが、近代市民的教養としての産児制限の文化的な意義を更に明瞭に理解することができようと思う。

四、今日の産児制限に附帯する二、三の暗影とこれの産児制限及討論について

(一) 今日の産児制限に附帯する二、三の暗影について

近代資本主義社会の発展に伴う州縣画割の急に表裏干渉するところを生ずる産児制限行為が、近代市民的教養の一つとして擔つてゐるその文化的意義にも拘らず、その中に制約された種々の偏向と欠陥とを指摘して取り、その大衆的動向を批判して未来に大きな不安と暗影とを投じて

いることも否定することはいできない。

人、その一つは今日の産界制限に共通の極め、個人主義的乃至巧利主義的や打算的生活態度で、しかもそれは単に近代的教養の未成熟というより

は、寧ろ近代社会の拒否し難い階級的分裂による真因を貫つていようである。寧ろ近代社会の拒否し難い階級的分裂による真因を貫つていようである。

と責任觀念とを放棄し特權的意識と厚利と富の打算とに解離し傳達しせざるをえぬ抑々の理由であると考へられるからである。理性は本能の中に

深い睿智として生じるかわりに、本能を敵視しなからずと和解の一條を劃することをのみ専念する護衛の本能に終始し勝ちである。近代合理主義的

精神の近代的な限界性も亦、今日の産界制限に適有する合理的精

神の根柢も亦これとをの欠陥を同じくするものではないであろうか。

2. 産児制限の火象的普及が墮胎行為の普及をその必然的の随伴現象と

してゐることと今日の産児制限の宿してゐる大なる暗影の一つであり、そ

してその理由はやほり今日の社会の階級的分裂性の中にあるといえよう。

それが特に労働者階級に近代的避妊法の普及として慣行される及びその

く、上層乃至中流階級においてもその特種的享樂意識の下に慣行されるこ

とが互いのほその病弊が深く今日の社会の階級的分裂性の中にあることを

実証して遺憾を以てものである。

3. 右の如き病弊と相関し、特に人口問題の立場から今日今日の産児

制限に附帯する最大の暗影は、その普及に伴う出生率の恒常的の低下傾向

と、その当然の結果として近い将来に豫期せられる新しい人口危機との概

算である。蓋しこの出生率の低下傾向を相殺して永く人口の自然増加を可

能にしまし死亡率の低下には一定の超え難い限度があり、依然ある出生率の低下傾向は、假令ハッかほ或る程度に陥つて停止するとしても、近い将来に人口が減少過程を必然的に進め、加速度的に進行せしめざるを得ないことが人口統計學的に推定せらるゝに到つたからである。のみならず今日の先進文明諸國の低出生率は既にその人口の再生産に必要を程度をも下廻つてあり、これらの諸國が現在を以て多少の人口自然増加を示してゐるのほどは、 $\sqrt{\quad}$ 進退に於ける人口増加の余澤は、かえれば壯年層の人口の比較的多い特殊な人口年令構成の結果に過ぎないことは周知のことである。しかも産児制限の大衆的普及に伴う出生率の低下傾向は一般に、通々の社会経済的茲に社会心理的必然性をもつものである。そして、人口が減少する社会を以て老年人口の増加を伴ふものと見做すものと

それは人口収容力を自ら狭隘化することによつてその過剰人口傾向を却つて愈々深刻化し乍ら更に加速度的な人口減少過程を辿らざるを得ぬ。そのような人口はそのものを「人口危機」と呼んで、人口危機といふのである。近代人口問題は、こゝに於いては、過剰人口の問題からそのような人口危機の問題にまで一轉したわけで、今日の産児制限の大衆的普及に於いて人口問題の立場から関心をせざるを得ない最も深刻な疑念と不安は、まさしくこの長にあるといえよう。

(五) 種々の産児制限及討論について

既に若干の踏影があり、特に人口問題上深刻な疑義を存する以上、産児制限の普及について多くの異義と反対があることと併当然といえよう。これら凡そが果して問題の核心に觸れぬものであるか如何かについては一

應の吟味を必要とする。

1. 国民経済學的觀点からする及利がある。産界制限の普及に伴う人口減少傾向が消費の減少を伴い、国民経済にとつて不利であることを説くもので、特に幼少年人口の減少が逼迫せる需要の減退を惹起することを強調するの点より論者は概ね共通である。併し乍ら、未成人には自ら購買力をもたず、いはるわけではなく、そして子供らのために当たらねば、購買力が利を得るよりよい生活のために消費せられるであらう。こゝには極めて自然な成りゆきでなければならぬ。惣じて人口の減少に伴う消費の減退は生活水準の向上によつて補償せられるのが経済の通則でもあり、そして一般生活水準の向上こそ経済発展の原則的傾向でもなければならぬ。が人口減少の国民経済的點を特に首働力の減少に求め、之に伴う消費の騰貴が資本

家的經營を困難にすることを説く論者もある。か労働力の減少と労賃の騰貴について、生産方法の機械化による補償があり、しかもそのよう生産の高度化こそ経済発展の本則をなすものでなければならぬ。若しこの反社論に更に何らかの根據があるならば、それは資本家の採算を越えた資本増成の高度化を忌避する資本家の利害に立つて、いわく、特に外国市場に於ける帝国主義的独占に高利潤の途が残されてゐることがその實際の理由であるを常例とする。そしてそのよう資本家の立場に於て市況大衆の實踐的イデオロギイである生産限界と根本的に矛盾したものであることは固より当然のことといわねばならぬ。

2. 民族優生學的親長論がある。反社論は生物學的親長を益々前面に押し出すことによつて、同じく純理論的立場を標榜する別種の有りな反社論

であるが、その及面却つて日常的な政治的先入見に囚はれてゐる感もはや
 日や拭い難い。産鬼制限に伴う生存競争の緩漫化が人類進化の退歩を結果
 するといふ所謂社会ダーウィニ主義的主張もその一つであるが、これは自
 然淘汰と社会淘汰、生物進化と社会進化との相違を無視したもので、この
 点や経生物學的論議は最近殆どその影を没したといつて可い。かま
 かわつて今日特に産鬼制限支持者の多くを占めるが民族優越論的視長が
 する反對で、上層階級に一層廣く普及した産鬼制限が民族素質の退化を結
 果せざるを得ないことを指摘するものがその論旨である。それは社会の改良
 と人間の向上を重視する産鬼制限思想の逆説的効果を指摘する長に於いて
 特に初果的ではあるが、しかし現存社会の階級的分化が果して生物學的に
 も最も自然な且つ合理的なものであるかといふかに論の当否は、かゝつてゐる

いふより。の不承り民族人口の階級別構成の間には常に人口交流の事
實があり、しかも下層階級からの指導階級人口の不断の補給は健全な社

会進化の表徴であるばかりでなく、純生物学的にみても亦首肯し得る事
の健全なる生命代謝機能といつてよいものがある。

3. 民族道徳論的視點からする及対も亦その支持者の少くない原因
にこの近代的放棄は対する疑義を各人の道徳的 conscience に訴えたいといふ

案に對して及対論中様に活用すべき地位を占めたい。その論旨は道徳行
為が行為の結果に及する幾程を回避せしめざるに及ぶ人間的行為の倫理

的本質に在ることとを指摘する異論に對しては、然るに道徳的義務の履行に
うき道徳的感徳の成否が運命共同體の繁栄の興廢に及ぶことと決定的な意義を

持つことを力説する要は無い。民族道徳論的義務の履行に及ぶことと決定的な意義を

持つことを力説する要は無い。民族道徳論的義務の履行に及ぶことと決定的な意義を

持つことを力説する要は無い。民族道徳論的義務の履行に及ぶことと決定的な意義を

持つことを力説する要は無い。民族道徳論的義務の履行に及ぶことと決定的な意義を

持つことを力説する要は無い。民族道徳論的義務の履行に及ぶことと決定的な意義を

持つことを力説する要は無い。民族道徳論的義務の履行に及ぶことと決定的な意義を

に於ては直接に異議のたしはすべからざるものなるが、しかし今日の産見制

限行を以つては批難せられる責任。回應はそれが個人道徳的に自覚する

と否とを問はず実は一層深刻な社会的觀念^{責任}を背景として行使せられるもの

であることをも我々は同時に考慮せねばならぬ。そこには生活のあらゆるこ

と利害とをなく享受しようとする近代的生活の欲求を鏡に近代的自意識の

支配下に陥こうとする近代市民に特有な悲壯な道徳的葛藤を呈現すること

が出来ない。それがなほ未完成の中元に宿してゐる不自然さと欠陥とによ

りてそのあらゆる努力がそのもの至不足を有すること、新しい社会経済的必然性

の中に自己を教化しつゝある市民大衆の道徳的完成を否定しようとするこ

ともあるわけだ。我々はこゝにも市民道徳の名に於いて安田と保平とを

擁護しよとす。階級的先入見の存在を編知せざるを得ない。是非賢

でも亦その階級的立場と不可分の結びつきをいへるといって

いふことだ。

夫、道德論的及び宗教的の論飾を強化せられしものに替りカトリックの教團からする及行論がある。人間の行爲の本質は罪の意識にまつて更に

深い道德的覚醒にまで呼ばれさせられしと共に、ついでに「意識は行爲の

結果に対する責任感をも更に強き自覚せしめ、至して「贖罪を通じて」表現され

る神の攝理観は個体的生命に訴ふ深き文化的感覺と神を介して實現され

る人間相互の運命共同体的結合感と強化するに十分である。その下に宗教

教思想が永く人間生活の健全を發展に寄與し、文化的意義に於いては説

くするべきである。特に今日の産業制限思想に最も欠けたるものと同様である

のである。我々の関心を惹きつけること、斯くも、これが今日の産業制限行爲

の中に胎動しつゝ、ある史的合黨を説きとるよりも、古い世界主義の國号し
ようとしがしきない異に於いては前段は民道徳論的及び共通の立場にある
ものであることを否定することはできまいと思ふ。

今、及討論の多くは、以上にもなる如く、この思想運動の階級的基礎とす
の史的使命に添つたものでなく、惣じて保守宗的立場をその暗黙の前提
としてゐる。之に反して、社会主義的立場からする産児制限観も亦、及び
論の一種に於えることには無理があるかもしれぬが、特異な態度を示し
てゐる。産児制限の普及と之に伴う出生率の低下傾向を今日の資本主義社
会の衰退没落過程の象徴とすることはその通説で、将来社会主義に於いて
は一人に収容力の非度の劃時代的を拡大と之に伴う再度の劃時代的増人口
増は可能であり、階級闘争下の労働者階級にとっては産児制限には全く

無関心であるとするのが少くとも正統社会主義者の共通の意見と云ふは
いかんれば、今日の産見制限の中に資本家的な便益と偽善とを不
労働者階級の階級闘争的手段としては何らの價値をも認め難いと考へる
のである。が産見制限の大众化には、上流層の同意と云ふのは、労働者を
も一個の近代市民としての生活意識とまで向上させ教化しようとする近代
社会発展の明らかな面があり、そしてそのもう一面は近代市民大衆層の健全なる
発展如何にその成否をかけたている。労働者階級の相互重視し、労働者階級の
階級的自覚の上に社会革命を達成しようとする社会主義的立場によつて産
見制限問題が重大な関心を惹かざるは程めて当然といつても可い。この
事實こそが今日の産見制限の真義を理解するのために如何なる社会階級的
利益と、後々として如何なる政治的志向とを必要とするかを裏面を示し

道徳的なものといえようと思う。

五、人口問題の立場からみた産児制限問題の核心長と人口政策的要請

近代市民階級の道徳的教養の一つとして誕生した産児制限の史的使命と念慮とは、已に上る産児制限及討論によつて活動かし難いが、今日の

産児制限の大衆化が宿してゐる若干の暗影を無視し難く、特に人口問題

の立場から指摘せられる新しい人口危機への杞憂は我が国にとつて最大の関

心事をなげかけざるを得ぬ。が危機の意識はもとく人口問題の問題意識に不

可分なその性格を有するといえる。そして過剰人口への杞憂が個人の生存権

をいかにかえれば個体的生命の自己目的的存在価値を媒介として

及びそれと人間共同の運命に及ぶ危機意識の表現に外ならずとも考へること

とが出来ることすれば、謂ふところの人口危機とはそのような倫理的価値の

存在論的前提である運命共同体的結合そのものの弛緩と解体の危険をい
 うわけ、人口問題はそのような危機意識を通じて真に人口問題固有の本質
 的・自題意識に立ち還るといふことでもできる。人口の減少過程が過剰人
 口傾向を緩和するよりも却って之を一層深刻にし、ながら人口の生物学的衰
 亡にまで進行するものがある。このような運命共同体的意識の解体過程を通じてこ
 れが行われるわけだ。それと我々は真に人口危機と呼ぶのである。従って人
 口危機への進行の必然性を理論的に確認することは歴史の進行を諦視し痛
 切視するのととは同じでない。社会経済学的分析が危機の必然性を確認す
 るところに、人口問題は即ちその問題意識を深くし、人口問題固有の本
 質に立ち還るのでなければならぬ。人口問題の立場からする社会経済的変
 革の要請は歴史の必然性の単に人間的な表現に過ぎないものではない。

それは、歴史の眞實の主体がある人間自身、共同の運命として実感せられ意
 識せられるものでなければならぬ。階級社会における階級的な制約と偽善
 性の中にも、その和聲に何らかの形で実感せられていねばならぬ。そのような運
 命共同体的意識への主体的な反省の中にこそ、その新しい歴史の轉化と新生
 の途を亦はじめて探られるであらう。そして、今日の産鬼制限問題に關聯し
 て、人は問題の立場から取りあげねばならぬ。問題の核心も亦そこにあるの
 でなければならぬ。

人は、その封建的停滞性から解放して近代社会生成の底に於て封建的
 制約を蓄積せられその欲望のゆえに却つて一層内政せられて、強い
 運命共同体的意識の自己再生の意欲の眞の歴史の起動力としての意義を無
 視することのできぬ。史上未曾有の近代的人口増加も新生せる近代民族國

家の生長を背景として、始めて可能なることからであった。近代社会とは資本主義的生産方法の導入が近代的民族国家の建設に新しい共同社会的結合の主体を再生しえたところから始まるのである。そして我々が「生産規制」問題に因縁して人口問題に配慮せざるを得ぬ新しい「人口危機の問題」とは、まさしくこの近代国家の体感にかゝる問題として立ち現われているといつてよいのである。

又、国家の人口政策的目標は根本において人口の健全なる保全と涵養の途に在るものである。人口史を單に過剰人口の制限史としてしかるべきは、社会的な制限と拘束の中に達成される人間の存在そのものの歴史、社会的形成力に盲目な見方で、人口現象が最も深刻な危機的様相を呈するところを却つて史観としての妥当性を喪わざるを得ぬ。特に今日の産児制

限問題を人口問題の立場から取りあげようとするとき一層その感を深く可
 るといえよう。近代的人口制限行為としてふたつの史的意義と含意とは区
 々ある及討論によつて否定し得るところではある。と同時にその大衆的普
 及に關聯して人口問題上関心せざるを得ぬ疑義と不安も亦柱りて深刻な
 である。い、かえれば我々自身の共同の運命にかゝる問題として配慮さ
 れねばならぬのである。

3. その破滅的の結果を防止する最善にして唯一の方途はその
 眞價を遺憾なく發揚せしめる以外にはない。是れ制限が近代市民階級の近
 代的教養として或然したるその歴史的事業と使命とをその深い精神史的
 含意に於いて助長し完成することになければならぬ。い、かえればこの
 近代的教養の實體的基盤である廣汎な近代市民階級層を近代國家の眞實の

主体として更に発展せしめざるか如何かはその成否ばかりか、ついでいふところ
てよいのである。

今日の産児制限に附帯する暗影がその原因を深く近代社会の階級的分裂
の時にまつていふこととは、その対策に多くの重大な社会経済的変革
作業を必要とするであろうことを物語るものであり、その根本的な解決は
或は将来社会主義社会に於いてのみ達成されることと思われしめ
るかも知れぬ。併し然らば、我々が産児制限問題に固執して疑念してゐる最
も合理的な同盟者は非社会主義社会に於いても亦同じく再燃するであら
うことは社会主義者自身の人口論が既にその一端を暗示してゐる。将来社
会主義社会に於ける女性の解放と産児制限の大衆化は我々が今日問題とし
てゐる人口危機を更に全人類の予規模と深くにおいて再現するかも知れぬ。

このこと我々も十分に認識してゐるのである。対策は重大な社会経済的諸
変革を媒介とせねばならないが、その目標とするところは人間自身の精神
史的意義に於ける革新作業の成否にあるわけだ。是の市民の自由にして
合理的な行功の中に同時に國民共同の運命を實感せしめるところの共同
社会の建設こそ其の最後の目的となるものでなければならぬ。

近代資本主義社会発展の基
階級的訂定の單純化と深刻化とを寧ろその一要因とし、止揚するところによつて生長して来た広汎な近代市民階級層の今後の更に健全なる発展のためには各般の重大なる社会経済的方策が必要ではあるが、産児制限問題に關聯して人口問題の立場から要望される社会経済的諸方策の目標とするところは、そのよから健全なる共同生活の中に体験されるところの人間の生存に對する健全なる文化的感懐の涵養にある。

るのてなればならぬ。さういふいみで我々の人口政策こそ民主主義的政
治指導下の文化國家にとつて最高の國策的課題であるといつてもよいと思
う。産児制限の啓蒙勸奨も、乃至は清勢に即應して防止制限も、これに較
べては單に末端的な行政技術的方策に過ぎないと思ふ。

六、總括的摘要

以上とくところの要旨を更に其の概記すれば概ね左の如くである。

一、個人の自由と責任とをその生活信條とする近代市民がその市民的義務

を一つとして身につけるに到つて産児制限行為は近代社会の史的本質

に相應して近代的人の制限行為としての深い歴史的含意がある。これは

利益得失を越えたる歴史的意義の存在理由とをもちている。生活のよりこ

を全幅的に享受しようとするよりむしろ社会的願望と全生活に利すところを

と合理化しようとする勝手で資本主義的な精神と同一個人の内にも
多く統合せねばならぬ近代主義は産業制限行為は恐らくその最も典
型的な道徳的葛藤と努力の産物であるとしてよく近代合理主義的精神
はこのような本能的性生活の中にまで拡張されたことによつて始めてそれ
が標榜する個人の解放と生活の合理化を完全するということもできよう。
それが勝れた近代的な市民的教養の一つと考えらるゝ所以で近代社会に
特有な社会階級別差別出生率はこのことを統計的に裏證して遺憾なきもの
といえよう。

2. この産業制限の思想とその実行とを培養し得た社会階級の基盤
は近代資本主義の発展がその発展途上に育つたところの広汎な勤労市
民階級層である。嘗ては支配階級の利害に奉仕せしめられた人論はこの

新しい階級的基盤の上に継承せられることによるそのイデオロギイ的性質を一新し、近代市民階級の理論として更生するに到るべしといふこともできよう。この近代市民階級の生成と拡大は近代資本主義発展の史的成果である一般生活水準の不断の上昇過程と表裏するものであるが、それが自己の労働力以外に市場に賣るべき商品をもたぬ労働者自身をも一個の近代市民として生活し怠惰し思考せしむるに足る程度にまで躍進し拡大されるに随つて、産児制限はその大衆化の途程をいよいよ速とし、産児制限問題は過剰人口問題に代つて近代人口問題の焦點に浮かんでくる。いかにいへば出生率の恒常的な低下傾向も亦加増の途程に浮上しはじめ、新しい人口危機への杞憂も試み難いものとなる。

3. 一般生活水準の上昇は産児制限思想の培養とその大衆的普及にとつ

不可欠の前提をなすものであるが、その直接の起動因となすものは、
 一般生活水準の上昇と表裏して実質的にも亦特に心理的にも愈々累加する
 ところの生計負擔の重圧である。社会的富と福祉の躍進的増大にも拘ら
 ずにはなす個人的能力を相対的に却つて減退せしめざるをえぬ資
 本主義経済に固有な發展傾向たる産界制限の眞實の社会経済的推進力をな
 すものであり、基本構造的な過剰人口傾向の中に新しい人口危機への進行
 を必然化する近代社会の人口法則でもあるのである。階級分化の単一的
 傾向は近代社会の基幹的動向として勤勞市民階級層の生成と表裏して進行
 して和り、近代市民の生活意識と社会心理的にいふと、
 織細過敏なものとなる。そして特に近代合理的主義的精神を皮相を巧利主義的打算の
 近界に停
 送せしめざるを得ぬ根本の理由も亦この階級的分裂性の中にあるといえよ

元 非合法的な墮胎行為が近代的避妊行為に必然的な随伴現象として現わ
 れるという理由も亦そこにある。惣じて道徳的積廢現象は人口現象に於ける
 産微的病弊の進行と不可分の一つを成るものなり。その病勢昂進の臨床
 的指標と有るに足るものである。

又 之を要するに近代市民的教養の一つとしての産児制限は近代資本主
 義社会発展に伴う明暗二面の相互に表裏干渉するところに生れ出され、
 そこには深い广域的な含意と文化的な意義があると同時に、それ等の生
 成の諸條件に制約され、單に未完成と未成熟の所為との母い、それ等の
 基本的な矛盾をも含んでいる。そして今日の産児制限が宿している若手の
 暗影は新しい人口危機への杞憂として人口問題の上から最大の関心を惹か
 ざるを得ない。彼等を合理的計算の精神が人間共同生活の母胎である

共同社会的結合の意識を解体させ、人間共同の運命に対する深い文化的感
覚を消磨させる危険を多分に孕んでいるところに謂うところの人口危機
人口そのものの生物学的衰亡の杞憂も亦ねざしているのである。い、か、え
れば、人口の減少過程が過剰に緩和するよりも却って愈々これを
深刻化してゆくであらう悪循環的を解体過程はまさしくそのようを運命共

同体的意識の基盤を介して本格的な足取りを取りはじめるのである。

△ 危機の意識こそまた人口問題と人口問題固有の問題意識にまで之
を還りせる。その過程が危機意識の中に再認識される運命共同体的意識への
主体的な反省こそ人口問題がその問題として意識される存在論的な根
本前提であり、従ってまた人口問題が歴史の進行に対して進んで発言し参

画する所以の真の據りどころにもなれば、人口問題の立場から

各般の社会経済的変革への要請も亦不こから出発し、至こ之帰一するもの
をなすべしなりぬ。それは結局するところ、広汎多数を近代市民階級層を近
代國家の民主主義的基礎と

命感を保全し培養するに成功し、如何かにか、つていふといつても、
命感を保全し培養するに成功し、如何かにか、つていふといつても、

度人を中心とし、弾力性ある人口の動きとがその政策的効果を評價する
べき最善の指標となるであろう。

七、特に我が国における問題の特殊の様態について

一、要するに西洋先進諸國を対象とし、
論議、その説くところには大
逆さしとするならば、原則的意味に於いて、我が国について、

著しやう。 及び近代國際社会における我が國の政治經濟的進歩性とその
 伴うたその社會經濟的錯綜性が特殊の形態の発現を余儀なくしてゐる
 ことを記憶せねばならぬ。 特に近代社会の發展に照應する各種の同題象面
 が同時に共存し、互に干渉錯綜してゐる言へば同題の重層的な錯綜性に注
 意せねばならぬ。

2. 近代日本の人口同題にとつて基本性格的を現象の一つは農村過剰人
 口及び同題の重層的な錯綜関係も亦こゝに於いて最も著しい。 社會經濟的
 にも又その人口現象の上にも一應の近代的解放を得ずから、近代産業資本
 の保護政策的な推進方策のよめに、その後の自生的な發展過程を遅延させ、
 うればばかりでなく、農村は國際競争裡の後進資本主義國にとつての唯一
 の武器である低賃金労働の給源としてその封建的諸關係を残余し農民の高

は最初の近代的市民として更生することもなく、かえれば我が國農村人
は敢初の近代的市民として更生することもなく、さうして近代的な賃
働者として自由に生きることもなかつたわけだ。そのような半封建的な生活
環境の中に近代的産鬼制限思想の侵襲する余地がなかつたことは極めて当
然のことといわねばならぬ。

3. 農村人については指摘せられる基本的性格は日本資本主義の発展が
進出した近代市民階級層についても亦妥当である。それは單に農村人にか
の最も有力な人的補給源であることに原因するばかりでなく、特に我が國

産業資本が早くから民生水準の犠牲において海外市場の独占利潤の極
身に専念しなげればならなかつたという事情がこの新しい市民階級層を極
めて低位な民生水準の中に停滞させざるを得なかつたことと注意せねばな

うぬ。多分に封建的を生活意識の残存と近代市民としての経済的逼迫とはその当然の結果としてこの社会層を一驚する性格的な事実となつてゐる。

そして傳統的な家族制度を背景として多産傾向は、こゝにも性格的な過剰人口傾向を現出して居り、最近に於ける出生率の低下傾向も近代市民的放蕩の普及を示すよりは寧ろ旧相を近代的生活様式の重疊により多くその原因をもちてゐるといつてよいと思う。

又、従つて、特に産児制限行為について云々不ても、農村地方の一部には今も旧時代の墮胎同引子の習俗が持続して居り、他方都市市民階級層に於いても経済的必要から強要されたその産児制限行為には本格的な思想的背景がなく、技術的にも性病予防の知識が轉用せられぬという程度まで進んでゐる。又、より遠くをいふが現情である。

我が國資本主義の後進國的な躁急性が國民大衆の進れに社會意識を
易にファシズム的變態を上げ、戰爭への冒險を敢えてし、
ことはさういふ意味で極めて當然な成りゆきであつたわけだ。従つて敗戦
後の現情は、敘上の基本性格的、過剩人口傾向が政治的事情によつてその最
大限にまで現實化せられるに到つたものといつてもよいものである。産児
制限が恰も國家再建の万能藥であるかの如く考へられる所以も亦ここにあ
るわけであるが、しかし我が社會經濟體制に於ける基本性格的矛盾を
根治することなしには畢竟産児制限の歴史的効果は、決して實効がな
いか、却つて多大の危險をも孕んでゐるものであることを茲には特に注意
せねばならぬ。以上

(本 頁 技 術)